

第 14 版 あとがき

——研究するための目録

『清末民初小説目録 第 14 版』を公開する。

本第 14 版の変更点はふたつある。

- 1 大幅に増補した。本目録は総 47,778 件を収録する。
- 2 「人名一覧」は削除した。電字版で公開しており全文検索が可能だからだ。

今までにない規模に増加したのには理由がある。初版（1988）より版を重ねるたびに収録件数が増えていく。本目録はそういう基本構造になっているからだ。また目録のための目録ではない。研究するための目録である。それを簡単に説明する（記述が以前と重複する箇所がある。ご容赦いただきたい）。

清末民初小説目録を編集するためには基礎情報が必要だ。新聞、雑誌、単行本の実物が不可欠である。しかし日本では限られたものにならざるをえない。「限られた」のは事実だ。できるかぎり実物を見る努力をしたが「限られた」結果になったという意味である。40 年も昔に日本国内の図書館をいくつか巡ったが関連雑誌書籍の実物は多くないという事実はどうしようもない。実物をまったく見なかったと誤解する人がいるからひとことつけ加えた。

日本という外国で清末民初小説の書目を作成することは基本から無理がある。それは否定できない。それでも編集に踏み切ったのは書誌情報を 1 本にまとめた目録が 1980 年代にはどこにも存在しなかったからだ。

1950 年代の阿英目録ではすでに間に合わなくなっていた。たとえば『繡像小説』所収の小説がある。1973 年、澤田瑞穂所蔵の該誌にもとづいて小説目録を作成した。90 種の小説のうち阿英目録は 19 種（約 21%）しか収録していないことが判明したのだ。目録としては不十分だとしかいいようがない。附言すれば新聞掲載の小説を収録した目録も当時は皆無だった。

その時、次善の方法として採用したのが信頼できる情報源を選抜することだ。実物にもとづいて作成されたであろう小説目録、雑誌目録、蔵書目録、専門研究書などから必要項目を抽出する。それが基本方針だ。

そう説明すると、資料を書き写すだけの簡単な作業にすぎないという人が必ずいる。正しいように見えるかもしれないが根本から間違っている。目録を作成したことのない門外漢の意見だ。偏見で固まった人は肝心な部分に気づいていない。元になる資料は探もしないのに目の前の地面に落ちているとでもいうのか。ありえない。専門書は次々に刊行される。それらにも目を配る必要がある。なによりもその簡単に見える作業を 30 年以上も継続して実行した人はいない。

詳細な小説目録、専門研究書、作品集が出てくるたびに該当部分をそのまま収容する。第 2 版（1997）から各小説作品についてそれらの典拠をいちいち明記した。追跡調査を可能にする工夫のひとつだ。目録としての信頼性を高める効果もある。最新の研究成果を収集し蓄積した本目録は研究状況の発展を反映した存在だといっている。

ただし注意点がひとつある。文献を長年にわたり積み重ねてきた結果だ。目にした文献から順番に引用してきた。すると初期の資料によって示された題名、作者、訳者、掲載紙誌、刊年などと後の文献の記載が異なるばあいがある。初期の記述は訂正せず残し、後の説明は追記するのが基本方針だ。言いかえればあとからより詳細な記載がでてくるとそれらは注釈欄に追記するかたちにならざるをえない。ひとつの作品について記述が異なるものが同居するわけだ。そこに注意してほしい。最終的な判断は利用者の判断にまかされる。記述が統一されていないとの批判はあたらない。

翻訳作品ならば原作を特定して記入するようつとめた。親切な研究者からご教示をいただいたら注記する。ただその原作探索は困難を極めており、いまだに不十分さを残しているといわざるをえない。

また収録小説の刊行年についても柔軟に対処している。機械的に1919年で打ち切っていない。『小説月報』は改革以前部分（創刊号—第11巻第12号）を対象にしたから1920年分も収録する。また商務版説部叢書第4集は1921-1924年に刊行された。範囲外だからといって排除すれば研究に不自由をきたす。収録対象に含めた。

のちの重版、作品集、全集を注記したのもすべて研究を優先するからである。本書を「研究するための目録」と称する理由だ。

以前には孟兆臣『中国近代小説史』（2005）の「小説目録」からも採取した。新聞小説を収録した初期の目録だ。その後劉永文『晚清小説目録』（2008。略号：[劉晚]）、『民国小説目録（1912-1920）』（2011。略号：[劉民]）および陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（2014。略号：[編年①-⑥]）が出た。本目録は劉目録も陳年表も関連部分を吸収してそのつど改版している。

信頼性の高い資料が公開されて点在する。それを本目録にまとめる。誤植、誤記が生じるのは避けられない。だが情報を1カ所に集めて電字版で公開すれば検索は自在だ。欠点よりも利点の方が上まわる。研究の手がかりになると考える。

資料の収集と点検を積み重ねて30年が経過した時のことだ。中国で刊行されたある目録（2018）を照合した。その結果、本目録第3版（齊魯書社2002）から特定の書誌情報を引き抜いて再編集したものと判明した。引用して成立した刊行物から劣化複写したのだ。少し驚いた。見方を変えれば本目録を利用編集して1本が刊行できるくらいに信頼性が高いと考えたものか。それは間違っていない。残念なのは紙媒体の旧版を使ったことだ。当時ネット上で公開していた最新版を使えばより精度の高い編集物になったはずだ。結局のところ、なんだろうな、と奇妙な気分だった（書評を書いた。「陸国飛『清末民初翻訳小説目録（1840-1919）』について——直視すれば……」『清末小説から』第134号2019.7.1）。

小説目録といいながら戯曲が混在していると批判する人がいるのも織り込みずみだ。

小説と角書のついた作品はできるだけ収録するのが編集方針というのがひとつ。清末民初時期には伝奇小説、弾詞小説という分類がある。1920年代に鄭振鐸がその歴史的事実を指摘している。すでに1世紀近くが経過し中国学界では常識でもある。後述する『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』も伝奇、弾詞を収録し「非小説」と注釈をつける。これが清末民初の実状を反映した目録だ。現在の知識で過去を裁断すべきではない。

小説と脚本が結びついている例をひとつ紹介する。

エッジワース（MARIA EDGEWORTH）“THE GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人”を尾崎紅葉が

『侠黒児』に改編した。それを呉禱が『侠黒奴』に漢訳する。その呉禱漢訳にもとづいて天宝宮人が「(改良戯劇) 義侠記 (一名黒奴報恩)」を書いた。

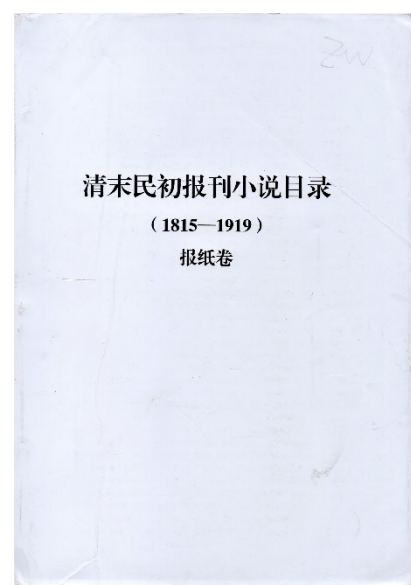
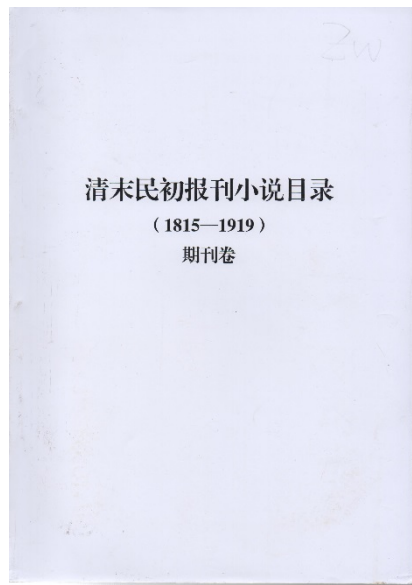
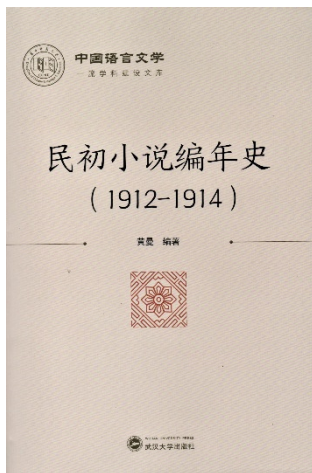
脚本だからと「義侠記」を排除する目録はそこにある研究の可能性を捨てたことを意味する。収録されているから漢訳小説から脚本へとその変化を検証する論文に結びつける賢明な人もいる。本目録が「研究するための目録」であると称する理由だ。

それを知らないらしく小説と戯曲の区別がついていない目録だと批判する人が現実にいる。左鵬軍のほかには東甫(広西師範大学文学院。「怪異的“小説”——《近代報刊小説目録》指瑕」『閲読与写作』2011年12期)である。歴史的事実を知らず、批判するために批判している典型的な例だ。研究にはなんの貢献もしない。

だいいち戯曲だとわかるように注釈部分に工夫をしている。また林訳を利用して文明戯に改編上演した記録まで一部を吸収した。上述のように小説と戯曲の関連を追求することもある。研究を優先すればそういう編集方針になるのは自然である。それに気づかないらしい。なによりも梁啓超、李伯元、林紓らの関連諸作品を収録しない目録など利用したいと思う研究者がいるだろうか。必要のない人は無視してほしいと昔から言っている。

本目録は最初に示しているように研究者を対象に編集している。そうでない人は手を出さないほうがいいだろう。

第14版は主として次の2種類を参照した。両書ともに新聞雑誌に掲載された小説を集める(単行本は採録していない)。



黄曼『民初小説編年史(1912-1914)』(武昌・武漢大学出版社2021.5。略号:[民小史])。2,622件を照合、新しく234件を追加(書評を書いた。「民初小説年表の最新成果——黄曼『民初小説編年史』について」『清末小説から』第145号2022.4.1)。

編者不記(郭輝)『清末民初報刊小説目録(1815-1919)』は2021年に入手した。雑誌(期刊)部分(略号:[清民刊])は8,508件を照合し、新たに1,804件を追加。新聞(報紙)部分(略号:[清民報])は9,559件を照合し、新たに8,150件を追加。

該書だけについていえば新聞雑誌掲載の小説について全18,067件を照合し、そのうえに合計9,954件を増補した。

以上の数字を目の前におけば『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』収録の小説数（単行本は未収）が群を抜いて多いことが理解できるだろう。

これほど大量の小説を収録し有益な注をつけた清末民初小説目録は珍しい（書評を書いた。「『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』について——出所不明の目録を私が信用する理由」『清末小説から』第146号2022.7.1）。

それらを参照したから本目録が収録する新聞雑誌掲載小説のすべてを再点検する結果になった。明らかな誤記は修正した。しかし判断のつかないものはそのまま残したものが多い。漢字、あるいは数字が一致しないばあいが多々ある。先行文献の不備を言う人がいるかもしれない。それは見当違いだ。既述のとおり記述の相違があればそこに注目してほしい。実物で確認して誤植、誤記を自分で正し補足することが任されている。その過程で新しい発見があるかもしれない。目録はあくまでも研究の手がかりを提供しているだけだ。

ということで本第14版の収録数が空前の最大規模になったのは必然である。本版の本文は8,145頁だ。参考までに示せば前の第13版は6,523頁だった。

基礎文献の編集には手間ヒマがかかる。それら貴重な成果に基づいて本目録は成立している。また親切な研究者からご教示をいただくこともある。教示者名と各文献名はすべて「典拠資料一覧」に明示した。それぞれの編者と関係者に敬意と感謝の気持ちを表すためだ。参考までに述べれば第14版までに使用した参考文献は累計982件になる。

次があるかどうかはわからない。精密な単行本目録が刊行されることがあれば、その時考えてもいい。

樽本照雄

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

（2016年研究会ウェブサイトは上記に移転しました）